

ジェラルド F ダクス、一メソジスト教会、米国（パート2/4）

:

明: “The Cross and the Crescent (十字架と三日月)” の著者であり学者でもあるダクスの生い立ち、そしてハバド「ホリス」神学校での勉学によってキリスト教から目をました彼の逸。パート2: 宗教心の欠如、ムスリムとのコンタクト、自、そして答え。

目: [新改宗者ムスリムの逸](#) [者と宗教的](#) [威](#)

より: ジェラルド F ダクス

04 Apr 2011

集日 04 Apr 2011

がつにつれ、私はアメリカ社会全体における信仰心の失をますます心配するようになりました。信仰心は生きることそのものであり、人の中の精神的道的呼吸であり、（例えば教会）によって礼、式などといった形式的信条を与えられた、いわゆる宗教性と取りえられてはならないものです。婚の三分の二は婚にり、私たちの学校や路上における暴力は加の一途をています。自己任は欠如し、教は“持ちよければ良いじゃないか”という念によって覆いされ、々なキリスト教指者や体は、性的もしくは的スキヤンダルによってき目をており、その行がいかに嫌されるかにわらず、感情が行を正当化しているのです。アメリカ文化は道的に破したものになりつつあり、私は自らの宗教的献身において孤独を感じずにはいられませんでした。

こうした状の中、私は地元のムスリムコミュニティと出会いました。その数年前、私と妻はアラブの史にして的にをしていました。そうこうするうちに、々のアラビア文献を翻しなければならぬ必要性が生じ、ムスリムのアラブアメリカ人とコンタクトをとるようになりました。ジャマルとの最初の出会いは1991年の夏でした。

最初の での会 の 、ジャマ ルは私の家を れ、翻 の仕事を引き受けてくれ、中 におけるアラブ の 史に して手助けしてくれました。その日の午 、ジャマ ルは る前に日々の礼 前に行なう体の洗 をするために、洗面所を してくれないかと ねてきました。また私の家を出る前に礼 もするので、礼 用 毯の代わりとして使う新 を してくれと nderきました。もちろん私たちはそれを承 しましたが、新 よりも 切なものを彼に渡すことが出来ないだろうかと nderたものです。そのときジャマ ルは全く意 することなく、ダアワ（布教 いざない）を美しい形で 践していたのです。彼は私たちがムスリムではなかったことについては何も言いませんでしたし、彼自身の宗教的信条についても全く触れませんでした。彼は に自らの模 を示し、そこに言 は くとも多くのことを物 ったのです。

その 16ヶ月 に渡り、ジャマ ルとの接触は二 に一回、そして 一回と、徐々に回数を していきました。それらの で、ジャマ ルは してイスラ ムについての宣教や、私の宗教的信条や 信について したり、私がムスリムになるよう示唆したりさえもしませんでした。しかしながら、私は多くを学び始めました。まず第一に、ジャマ ルによる 日の礼 の行式による例を常に目にしていました。第二に、ジャマ ルがいかに日常生活において高いレベルのモラルと 理基 を仕事と社会生活のどちらにおいても 持し、 践していたかということです。そして第三に、ジャマ ルの二人の子供に する彼の 度と行 です。私の妻にし、ジャマ ルの妻も同 の例を提供しました。第四に、中 におけるアラブ の 史について私が常に理解の出来るよう、次の事柄を共有してくれました：1) アラブ イスラ ムの史という 面からの逸 ；2) 言者ムハンマド（神の慈悲と祝福あれ）の言行；3) クルアンの 々とそれらの文 上の意味。事 、私たちの会 は、 回最低30分 はイスラ ムの 面に してのことが中心となりましたが、それは常に、イスラ ム的文 におけるアラブ の 史の理解といった理知的な提示の仕方だったのです。私は「こうあるべきなのだ」とは して言われませんでしたし、ただ に「これがムスリムによって一般的に信じられていることです」と言われました。私は「宣教」されているとは感じなかったし、ジャマ ルは私の信条についても いてはこなかったので、私は自分のスタンスについての正当化を みる必要がありませんでした。それらはすべて知的 として取り われたものであり、改宗に向けた みではなかったのです。

ジャマルは、地元ムスリムコミュニティの他のアラブ人家族を私たちに介し始めました。ワイルの一家、ハリドの一家、そしてその他の家族などです。私は彼らに共通して、私たちの住むアメリカ社会の理基よりもより高いものに基づいた生活をしていることを出しました。私は、ひょっとすると大学生、神学生代に何か逃していたイスラムの践があるのではないだろうか、と思うようになりました。

1992年の12月になると、私は自分がどこにいて、何をしているのかを真に自覚するようになりました。これらの は次の点によって考 されます。

1) 去16ヶ月における私たちの社会生活は、地元アラブ人によって成されたムスリムコミュニティが中心だったこと。12月には、私たちの社交生活における75%をアラブ人ムスリムたちと ごとしていたこと。

2) 私は神学 と勉学の によって、いかに酷くバイブルが改 されたかを知っていましたし、神格の三位一体 への信仰は全く持っておらず、イエス（神の慈悲と祝福あれ）の“子性”が 的であること以外にはそれを全く信じていませんでした。つまり、私は神の存在を 信じていましたし、私のムスリムの友人たちと同じように、 格な一神教徒だったのです。

3) 私の 人的な と理基 は、私の周 の“キリスト教徒”社会よりも、ムスリムの友人たちの方に同 しました。私はジャマル、ハリド、ワイルたちの平和的例 を模 としました。私の生まれ育ったコミュニティへのノスタルジックな の情はムスリムコミュニティにおける 足によって たされたのです。アメリカ社会は道 的に破 しているかも知れませんが、私が ったムスリムコミュニティに しては例外だったのです。婚姻 は安定しており、配偶者たちはお互いに尽くし、 さ、清廉さ、自己 任、そして 的な家庭 が されてきました。私と妻はそれと同じような生き方をしようと みました。が、数年 に渡り、私たちはそれを道 的に空虚な状 においてそうしていたように感じたのです。ムスリムコミュニティは うように映りました。

々ななるいが、一つの束になってい合わされていきました。アラブ、私の幼少期、私によるキリスト教者と神学教育への望、道的社会への憧れ、そしてムスリムコミュニティとの出会いは、すべてに交わり合っていたのです。私の自は、最終的に何が私とムスリムの友人たちの信条を隔てているのかを自分にいかけたとき、ようやく展をせました。このをジャマルやハリドにいただくことも出来たのですが、私にはそれが出来ていなかったのです。私は彼らとは一度も自分の宗教的信条にしてしたことはありませんでしたし、私たちの友情にそのようなを持ちむことはしたくなかったのです。こうして私は大学、神学校代に入手したイスラムにする本を本棚から出し始めました。いくら私の信条が、教会の的立からくかけれ、ごく稀にしか教会に出席していなかったとしても、私は依然として自らをキリスト教徒としてしていたため、西洋学者たちの著作に手を伸ばしたのです。その年の12月に、私は西洋学者によるイスラムにする本を六程度みましたが、そこには言者ムハンマド（神の慈悲と祝福あれ）の本も含まれていました。さらに、クルアンの英も二み始めました。私はこの自己の探求について、ムスリムの友人たちには一度も告げませんでした。私がどのようなの本をんでいたのか、そしてなぜそれらをんでいたのかさえも触れませんでした。しかし、私はとして、非常に回りくどい表を使って彼らにはしたものです。

私はムスリムの友人たちにこれらの本について明かしませんでした。妻とは私のんでいた本について数々の会を交わしました。1992年12月の最のには、私は自分の宗教的信条とイスラムにおける主要な信条には定的相がないことをめざるを得ませんでした。私はムハンマド（神の慈悲と祝福あれ）が言者（感の影によってる人物としての）であるとめるが出来ており、また唯一なる神（至高なるかれに称あれ）以外には他に崇すべきものはないと全く躊躇なく断言出来たにもわらず、依然として重要な断を下せずにいました。しかし私は自分の理解する限りにおいて、教会としての的キリスト教よりもイスラムの信条に共感するところがめて多いことをめることは出来ました。また私は、クルアンがキリスト教、バイブル、そしてイエス（神の慈悲と祝福あれ）についてることの大半が、私が神学教育において学んだことと一致しているということも十分承知していたのです。

この 事のウェブアドレス:

<https://www.islamreligion.com/jp/articles/76>

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2024 IslamReligion.com. 断 を禁じます。